

『桜吹雪』

花さそふ あらしの庭の 雪ならで ふりゆくものは 我が身なりけり

にゅうどうさきのだじょうだいじん
入道前太政大臣

【現代訳】

山から吹き降ろされる強風によって、桜の花びらが庭で雪のように降っているが、古くなって散ってゆくのは、我が身であることよ。

作者は西園寺公経さいおんじきんつねです。鎌倉時代に朝廷が幕府に対して兵をあげた承久じょうきゅうの乱のとき、朝廷側であったにも関わらず、その企てを幕府に漏らし幽閉ゆうへいされました。しかし、幕府側が勝利した後はその功績もあって太政大臣の位まで昇りつめました。貴族から武士の時代へ移り変わるときに、嵐のような激動の人生を経て、老いていく自分を桜吹雪に重ねてこの歌を詠んだのでしょうか。

そして、出家して仏の道に入るとき、西園寺を建てて住みました。それは、中国の宋そうとの貿易等で得た財を尽くして建てられた豪奢ごうしゃなもので風雅ふうがな庭園も素晴らしく、後に足利義満あしかがよしみつが譲り受けて別荘とした金閣寺きんかくじです。栄華えいがを極めた後の老いは寂しいものですが、枯れてゆく味わいもまた美しい、そんな侘わび寂さび、幽玄ゆうげんを感じる一首です。

山陽小野田かるた協会 久保 久美子